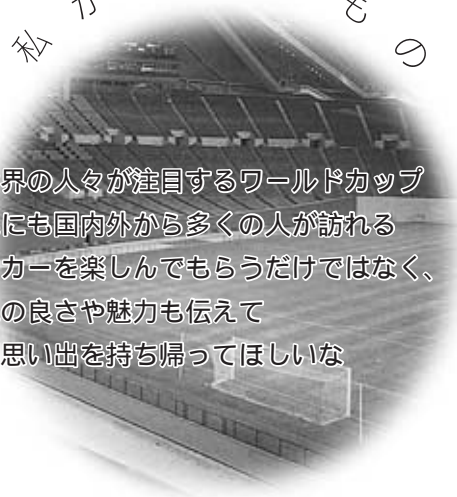


2002年、私たちが目指すもの

「札幌は楽しかったな、また来たいな、後でそう思い起こしてもらえたら、すてきですよ」。

私 が 目 指 す も の

全世界の人々が注目するワールドカップ
札幌にも国内外から多くの人を訪れる
サッカーを楽しんでもらうだけではなく、
札幌の良さや魅力も伝えて
いい思い出を持ち帰ってほしいな



二〇〇二年FIFAワールドカップ
札幌市ボランティア

矢原 幸子 さん

ワールドカップ

の開幕が、よいよ

迫ってきました。世界のサッカー強豪国が札幌で試合を行い、国内外から多くの人を観戦に訪れます。その大会の運営には、ボランティアの存在が欠かせません。これまでにJAWOC(二〇〇二年FIFAワールドカップ日本組織委員会)や札幌市では、さまざまな分野のボランティアを募集し、現在は本番に向けて研修が続いています。そんなボランティアの一人、矢原幸子さんは、札幌の魅力を紹介するシテIPRの役割を担うことになりました。

以前から、札幌市の観光ボランティアとして活動してきた矢原さん。「退職後、何か人の役に立つ活動をしたと思っていました。それで、あれこれ考えてばかりではなく、実際に行動しよう」と、当時募集していた観光ボランティアに挑戦することにしたんです。ワールドカップのボランティアもそう。お話を聞いた時、とにかくトライしてみようと思ったの。

矢原さんが観光ボランティアに関心を抱いたのは、長く住んでいながら、札幌のこと

をあまり知らなかったと気が付き、自分が暮らす街を見つめ直す良い機会になると考えたからです。「学問は人格の養分」と言う矢原さんは、とても好奇心が強く、探究心もおう盛。勉強を積み重ねた語学は現在のボランティア活動にも役立っています。また、雑誌のスクラップなども日課にしているそうです。

「観光客の方から、おいしいラーメン店を教えてくださいとよく聞かれます。それで、私もいろいろなお店を食べ歩きましたよ。単に見聞きしたものではなく、実際に自分が体験したものでなければ、人に薦めることはできませんから」と矢原さん。その言葉からは、耳学問ではなく、自分の頭で考え、体感したもの

こそが本当の知識となる、そんな信念が垣間見えます。

そして、矢原さんが大切にしているもう一つの話は、相手の立場で物事を考えること。「相手の方の趣味、し好をよく聞き、その方にふさわしいものをご案内するようにしています。決して自分だけの価値観を押し付けないことです」。まさにワールドカップでは、多種多様な価値観を持つ人々を迎え入れることが求められます。きつと、矢原さんならどんな人にも、札幌での思い出づくりに手を貸すことができるはずですよ。

「札幌は楽しかったな、また来たいな、後でそう思い起こしてもらえたら、すてきですよ。そのために、私も体当たりで頑張ります」。



矢原幸子さん。いろいろな目標を定めて、エネルギーを毎日を送っている。今後は、アジアとの文化交流にも貢献できれば、と語る